

研究ノート

大規模祭祀遺構における石製模造品祭祀の主体

—古墳時代中期後半の群馬県西部を中心に—

寺西 良騎

要旨

本稿では、大規模祭祀がどの階層により行われたのか、剣形石製模造品を用いて検討を行なった。群馬県西部地域を検討対象として、遺構ごとに型式と穿孔数を用いて剣形石製模造品を分類した。分類結果をもとに、1型式の剣形石製模造品入手数量、同時使用が推定される数量、共伴する他器種石製模造品の3項目と階層の関係を整理した。

分析結果として、TK23・47型式期～MT15型式期に、①首長居館とその周辺、大規模祭祀遺構では、同型式の石製模造品が多量に使用されていたこと、②一般的な集落遺跡では、石製模造品の使用数が少なかったこと、③石製模造品の使用形態として、複数器種・多量使用と、単器種1・2点の使用形態が存在していたこと。また複数器種・多量使用形態は、首長居館とその周辺、大規模祭祀遺構で用いられたことを明らかにした。石製模造品の複数器種・多量使用が確認できた大規模祭祀遺構は、首長居館との共通性より首長層が祭祀遺物を使用または、供給していたことを指摘した。その背景として、古墳時代中期後半になんでも首長層には、地域の祭祀をリードする重要な役割が存在した。

キーワード：古墳時代 東日本 石製模造品 祭祀

はじめに

石製模造品とは、古墳時代中期を中心に、古墳における葬送儀礼や集落のまつりに使用されたもので、実在する器物を軟質石材で模造した遺物である。その研究は、古墳に副葬されたもの、集落遺跡と祭祀遺跡で祭祀具として使用されたものに分けられてきた。

古墳時代中期後半（TK208型式期～TK23・47型式期）に、土器集積遺構と呼ばれる大規模祭祀遺構が出現する。この遺構からは、数百という遺物が検出された。祭祀遺構における多量かつ多彩な遺物の存在は、地域社会での祭祀の重要性を示している。

大規模祭祀遺構において、中心的な遺物が石製模造品である。この石製模造品の使用階層を明らかにすることは、大規模祭祀執行の主体階層を考えるうえで重要である。しかし、現在の研究では、着目する石製模造品の器種により、2通りの解釈が存在する。1つ目は、古墳副葬品と共に農工具形石製模造品（以下、農工具形）が存在することより、首長の主体性を重視するもの。2つ目は、集落にて一般的にみられる剣形石製模造品（以下、剣形）や勾玉形¹⁾、鏡を模倣したとみられる有孔円盤に着目し、集落住民の主体性を重視するものである。

祭祀遺構出土石製模造品の内、農工具形は極めて客体

的であり、祭祀主体を反映しているとは言い難い。よって、剣形や勾玉形、有孔円盤を使用した階層が、この祭祀の主体であったと考えられる。しかし、剣形などは集落遺跡で確認できるが、首長居館からも出土し、多様な解釈が可能となっている。

以上の課題を受けて、本稿では剣形や勾玉形、有孔円盤を用いて、使用者の階層を推定できる要素を模索することを第一の目標とする。そして第二の目標として、本稿の分析結果をもとに、大規模祭祀遺構の祭祀主体階層を明らかとする。

I. 研究史と課題

(1) 研究略史

石製模造品の研究は、大きく古墳での葬送において用いられたものと、集落遺跡や祭祀遺跡のまつりで使用されたものに分けられて行われてきた。

祭祀遺跡の研究では、1960年代から大場磐雄氏や亀井正道氏などにより、石製模造品の分類や時期的変遷がまとめられた（大場 1962, 亀井 1966）。両氏による発掘調査により、峠や神奈備山、磐座とみられる巨石周辺からは、多量の石製模造品と土器が出土する状況が確認された。一方、集落遺跡における石製模造品の検出数も増

加し、大規模な集成が行われた（東日本埋蔵文化財研究会 1993, 埋蔵文化財研究会 2005）。これらをふまえ、器種組成や製作技法から石製模造品祭祀を整理する研究が進展した。

近年では、深澤敦仁氏や佐久間正明氏により、古墳・大規模祭祀遺跡（遺構）は上位階層、集落・小規模祭祀遺跡は一般集落構成員による祭祀と評価され（深澤 2007, 佐久間 2009）、古墳・集落遺跡を横断した石製模造品研究の今日的到達点を示された。大規模祭祀遺跡における祭祀主体に関しては、集落住民の主体性を重視する意見もある（平岩 2007）。これは集落遺跡と同様の土師器と剣形や勾玉形が出土することを根拠としている。

(2) 課題

大規模祭祀遺跡（遺構）における、祭祀主体の階層をめぐる議論の中で、石製模造品が用いられてきた。祭祀遺跡から出土する石製模造品は、農工具形と剣形や勾玉形、有孔円盤である。農工具形は、古墳副葬品としても用いられる。つまり古墳との共通性を重視し、首長層を祭祀主体と考えることができる。

しかし、農工具形は、祭祀遺跡においては極めて客体的である。祭祀遺構では、剣形や勾玉形、有孔円盤が中心的な石製模造品である。この3器種は、首長居館からも出土するが、集落遺跡からの出土も目立つ。この事実は、集落住民が剣形や勾玉形を用いた祭祀を行っていたことを想定させる。以上を根拠として、農工具形に焦点を当て、首長層の役割を重視する派と、剣形などの3器種をもとに集落住民を重視するかで、祭祀執行階層に関する研究者間の見解が異なっているとみられる。よって、祭祀遺構で中心的に使用された、剣形など3器種の使用階層を明らかとすることが、祭祀主体の階層を考える上で有効である。

ここで問題となることは、剣形などの3器種が、どの階層により使用されたのかについて、判断する基準が定められていないことである。この問題を解決するために、3器種の出土数量と階層の関係性に着目する。首長居館と集落遺跡では、3器種の石製模造品出土数量が大きく異なる。この首長居館と集落遺跡の数量差は、階層ごとに石製模造品の入手環境や使用方法が異なっていたことを示唆するものである。

本稿では、この数量差が生じた要因について、入手環境・使用方法と階層の関係性を整理することにより明らかとする。また上記の整理結果を踏まえて、入手環境・使用方法の視点から、大規模祭祀遺構で剣形などの3器種を使用した階層を明らかにすることを目的とする。

(3) 本稿における分析手続き

本稿の分析手続きとしては、はじめに同時使用された石製模造品の観察を行う。この観察を通して、同時使用された石製模造品の特徴・共通性を把握する。

次に得られた特徴をもとにして、分類基準を設定する。この分類は、同時使用された点数を遺構ごとに抽出することを通して、使用方法の復元を目的とする。そして、使用方法と階層の関係性を整理することで、課題の解決をはかる。また観察を行いながら、入手環境と階層の関係を明らかにできる要素を摸索して、具体的な方法を提示する。

検討対象としては、首長層は居住施設である首長居館とし、集落住民は堅穴建物とする。以上の分析を行い、入手環境・使用方法と階層の関係性を明らかとした後に、大規模祭祀遺跡（遺構）の石製模造品を分析する。分析結果をもとに、どの階層の関与で大規模祭祀遺跡の石製模造品が供給可能であったのか考察を行う。以上の分析手続きで課題の解決を行う。

(4) 扱う地域と年代

石製模造品は、地域ごとに工房が検出されており、その在り方も多様である。本稿では、製作についての一定の情報共有が存在したであろう、限定された範囲を対象として検討を行う。

幅広い階層での石製模造品出土例が知られている地域として、群馬県西部があげられる（図1）。当地域では、中期後半頃に集落遺跡での石製模造品使用が盛行し、多くの調査事例が蓄積されている。また石製模造品の原石である蛇紋岩や滑石産出地の三波川帯が地域内に存在することから、多くの製作工房も検出されている。以上の理由から、群馬県西部地域を対象とする。

また、同時使用された石製模造品を判断する上で、良好な状況が残存することが望ましい。この条件を満たす遺跡が、渋川市の金井遺跡群（金井東裏遺跡と金井下新



図1. 金井遺跡群と周辺環境（筆者作成）

田遺跡)である。当遺跡群は、群馬県榛名山二ッ岳噴火テフラ Hr-FA (AD497 + 3/-6 早川 2015) に伴う火碎流により、一瞬で埋没した集落や首長居館、祭祀遺構を内包する遺跡群である。本稿では、この金井遺跡群を中心に検討を行う。

(5) 検討対象

剣形・勾玉形・有孔円盤の中で、剣形を主軸として論を進める。その理由は、まず剣形が群馬県において最も用いられた石製模造品であること。そして首長居館や祭祀遺構、堅穴建物など幅広い遺構から出土すること。この多様な遺構から出土することを用いて、同一の基準で議論を行えることがあげられる。また剣形は、有孔円盤や勾玉形よりも、形態差に富んでいる。内包する諸属性から、同時使用を特徴づける要素を把握できる可能性が高いことも大きな理由である。なお器種の認定は、報告書を参考にし、筆者が行った。

II. 同時使用された石製模造品

(1) 資料の観察と結果

本章では、同時使用された剣形の観察を行う。そして、

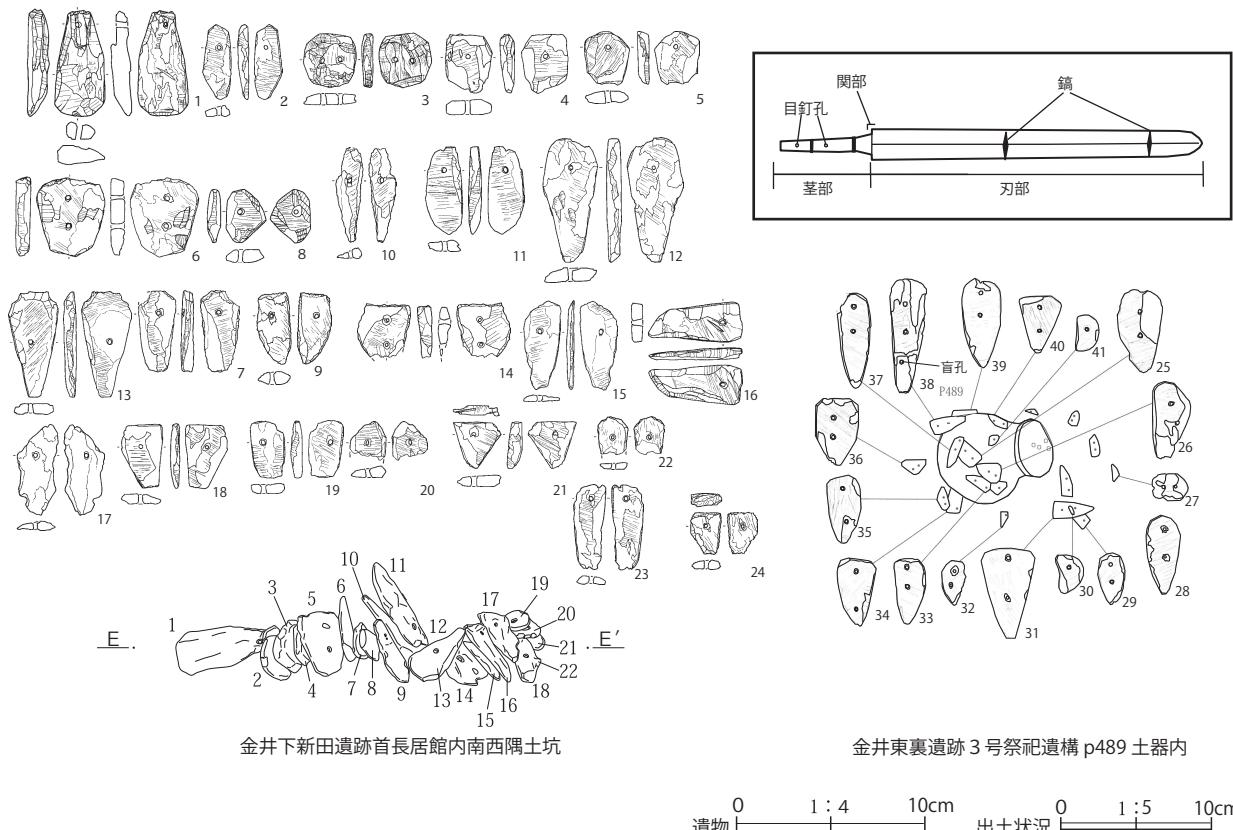


図2. 使用状態を留める石製模造品群 (杉山など 2019・2021 をもとに筆者作成)

把握できた特徴や共通性から、入手環境・使用方法を復元するのに有効な分類基準を作成する。なお剣形の部位名称は図2に記載した。

石製模造品が使用時の状況を良好に留めている例として、2例があげられる。1つは金井下新田遺跡首長居館内に位置する南西隅土坑である(図2-1~24)。南西隅土坑では、石製模造品が穿孔方向を同じ方向に向け、1列に並んだ状況で出土した。出土状況から、複数の石製模造品が紐で結ばれた状態で、土坑へ埋納されたと理解できる。石製模造品は粗雑かつ残存状況が悪く、器種が特定不可能なものが複数ある。判断可能な石製模造品として、斧形(図2-1)と有孔円盤(図2-3・6・14)、鎌形(図2-16)と剣形(図2-2・7・9・11・12・13・15・18・21・23)10点が確認できる。

2つ目は、金井東裏遺跡の3号祭祀遺構にて確認された、p489群土器外である(図2-25~41)。p489群土器外では、土師器堆の器面に沿って、石製模造品が堆を囲むような形で検出された。構成は、剣形14点(図2-25・26・28・29・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40)に加えて、有孔円盤(図2-27)と勾玉形(図2-30・41)である。報告書では、土師器堆に石製模造品が紐で繋がっていた姿が想定されている。

火山灰の堆積状況や土器型式から、同時使用された2例は、中期末頃に位置付けられる。この2例を対

象に、剣形の茎部・関部・鎧表現と穿孔数の観察を行い、観察結果を図3に記した。

同時使用された剣形の特徴をまとめると、特徴①剣形は同型式であることがわかる。剣形は模造初期段階では、鉄剣を忠実に模倣する。明確な茎部・関部が存在し、両面に鎧表現が存在する。これらの部位表現²⁾は、時期を経て省力・不明瞭化することが指摘されている（篠原1997）。上記のような部位表現がどれほど作出されているかが型式を判断する属性となる。この2例では、図3-12・13・39のような茎部・関部が不明瞭な剣形がみられる。また図3-9・21・31などの茎部・関部の表現がない資料が確認できる。鎧表現は全ての資料で確認できない。

観察結果の茎部・関部・鎧表現不明瞭／なしの特徴から、篠原剣形編年の5世紀末の型式と判断でき、土器型式の年代と対応する。以上の特徴から同時使用された剣形は、その時期に生産されていた型式を、祭祀の必要に応じて入手・使用したことが分かる。

特徴②は、剣形の穿孔数が一致することである。南西隅土坑では全て単孔であり、p489群土器外は全て双孔である。観察結果より、紐を通すなどの機能的な理由から、穿孔数が揃う剣形の入手が行われたと判断できる。

(2) 資料の分類基準

以上の観察結果を用いて、分類基準を設定する。図2・3の観察結果をもとに図4を作成した。

まず剣形の分類基準①として、剣形の型式を用いる。型式分類を茎部・関部・鎧表現にもとづいて行う。先ほどの観察より、製作から使用までの時期差はみられないことから、各型式を使用の時期と捉える。

次に分類基準②として穿孔数を用いる。これは分類基準①の中での細分である。この分類により、同時期に製作されたまとまりから、機能的に同時使用された可能性があるまとまりを抽出する。

以上の分類が入手環境・使用方法の復元に有効か確認

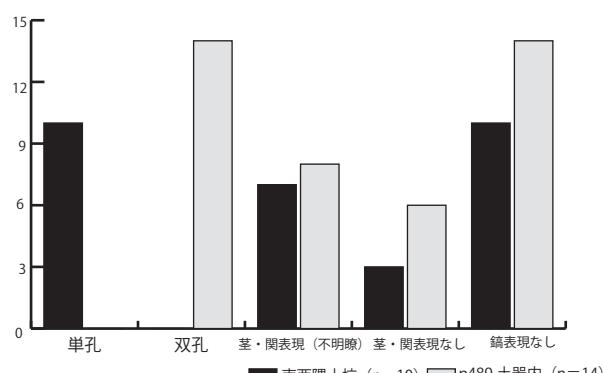


図3. 同時使用された剣形石製模造品の属性（筆者作成）

する。まず、分類基準①から、入手・使用数を1型式期という限定された時間の単位で確認できる。そして各型式の点数と階層の関係性を整理することにより、階層ごとに一定期間内の入手数を明らかにできる。この入手数量は、入手環境と密接に関わっているとみられる。よって分類基準①は、入手環境の復元に有効と判断できる。

分類基準②からは、同時に使用された可能性がある剣形を抽出することができる。1つの遺構内において、剣形が全て同時使用されていた場合、他器種の石製模造品も剣形と同時に使用されたとも考えられる。この石製模造品のまとまりを出土状況も考慮しながら検討することで、石製模造品の使用方法を復元できると考える。

よって、分類基準①・②は、階層と入手環境・使用方法の関係性を明らかとする上で有効であると判断できる。この基準をもとに遺構種別ごとに分類を行う。

III. 首長居館とその周辺

(1) 首長居館の立地と祭祀遺構

金井遺跡群南側の金井下新田遺跡4～6区には、網代垣により区画がなされた首長居館が位置する。居館は深い谷を挟んで集落域とは分けられて存在する（桜岡・原2021）。この首長居館の成立以降、首長居館内と居館南側の約30m範囲内で多くの祭祀遺構が成立する（図5）。

首長居館内には先述の南西隅土坑のほかに、小型の土坑から捩文鏡と剣形2点が出土した鏡埋納土坑が存在する。また居館本体とみられる5区1号堅穴建物からは、勾玉形及び剣形が1点出土している。

居館周辺では、複数の須恵器高坏形器台が出土した5区4号遺構、古墳副葬品と共に通する農工具形のほか、短甲形の石製模造品が出土した、5区6号遺構などが位置している。これらは露天の祭祀遺構であり、5区6号遺構は垣で囲繞されていた。立地と出土遺物から首長居館の居住者が行った祭祀と判断できる。これらの遺構出土剣形について、分類基準①・②にもとづいて分類を行う。

(2) 分析と結果

遺構ごとに剣形の分類を行い、結果を図7に提示した。首長居館内の鏡埋納土坑出土剣形は（図6-2・3）、茎・

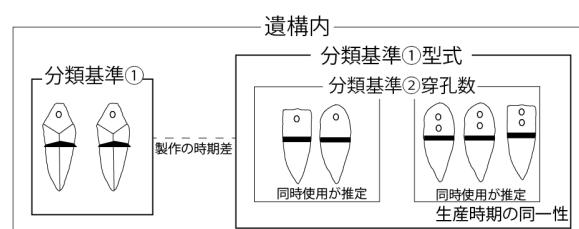


図4. 本稿の分類基準（筆者作成）

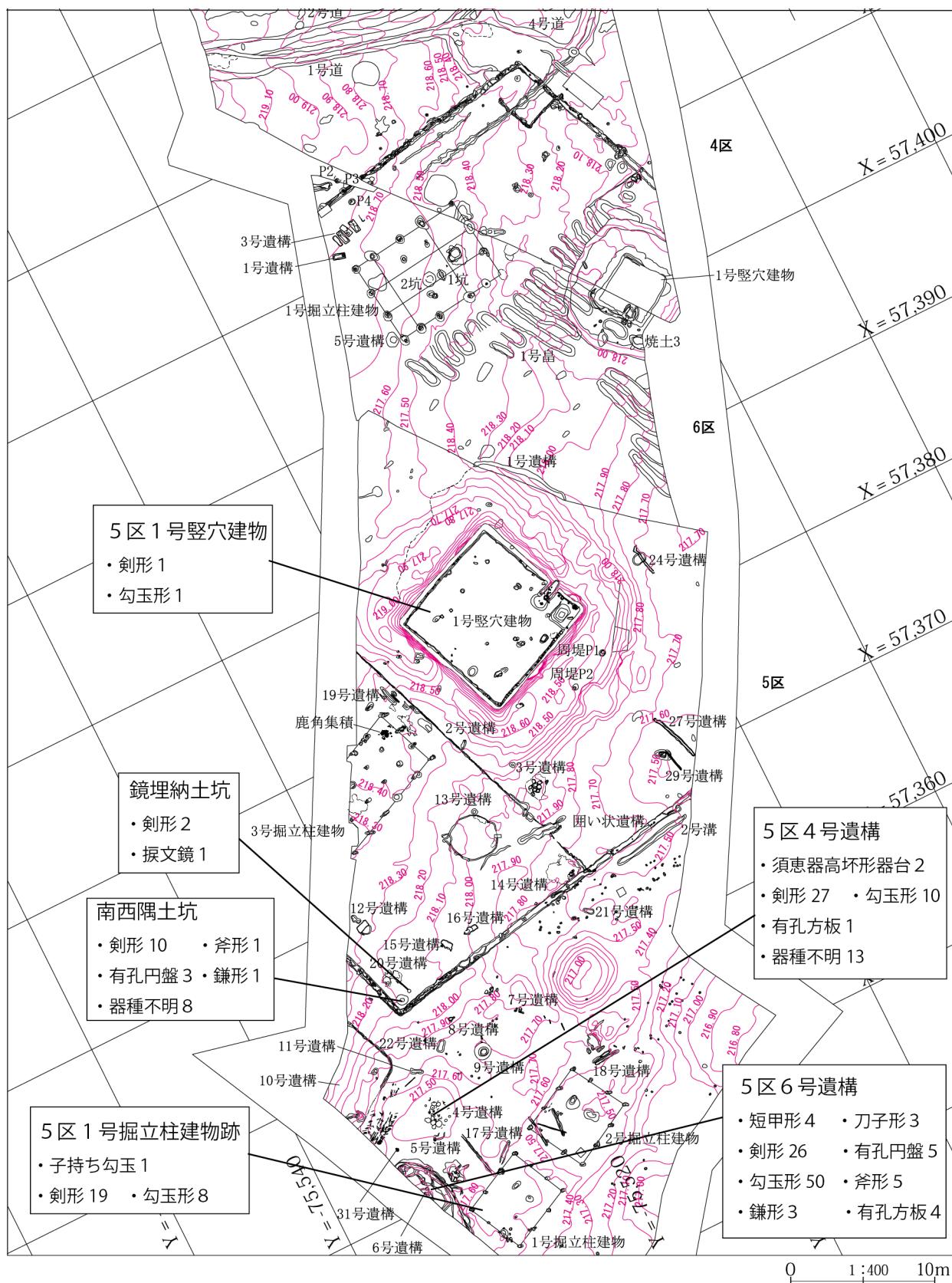


図5. 首長居館内と周辺の石製模造品出土遺構（杉山ほか 2021 に筆者加筆）



1~3・38~49・54~75 単孔、茎部・関部・鎧表現不明瞭 / なし 5~37・50~53 双孔、茎部・関部・鎧表現不明瞭 / なし
4 双孔、関部表現あり、茎部・鎧表現なし

関部表現が不明確であり、鎧表現も存在しない。以上より、同型式と判断でき、穿孔数も単孔で統一されている。

居館周辺遺構の5区1号掘立柱建物跡（図6-4～22）では、19点の剣形が存在する。図6-4のみ関部表現が確認できる。図6-5～22までは、茎部・関部・鎧といった部位表現は不明瞭である。穿孔数は全て双孔である。

5区4号遺構では（図6-23～49）、27点の剣形が存在する。全体を通して、茎部・関部・鎧といった部位表現は不明瞭または存在しない。穿孔数にはばらつきがみられ、双孔が15点あり（図6-23～37）、単孔は12点である（図6-38～49）。

5区6号遺構では（図6-50～75）、26点の剣形が存在する。全体を通して、茎部・関部・鎧といった部位表現は不明瞭または存在しない。穿孔数は双孔が4点（図6-50～53）であり、単孔が22点（図6-54～75）とわずかにばらつきがある。

続いて出土状況の確認を行う。一括性が高い遺構として、南西隅土坑のほかに鏡埋納土坑があげられる。この遺構から出土した剣形は、型式と穿孔数が一致する。また、5区1号堅穴建物から出土した剣形は1点であり、単独で使用されたとみられる。その他の首長居館周辺の遺構は、祭祀形態が露天であり、散逸的な出土状況を示す。同時使用数を特定するのは困難である。

整理すると、首長居館及びその周辺においては、遺構ごとに1点～26点の同型式の剣形が入手されていた。そして分類結果と出土状況より、同時使用数は先述の南西隅土坑の10点が確認できる。また鏡埋納土坑の2点、5区1号堅穴建物内の1点のみ出土した事例も同時使用された例とみなすことができる。

以上より、首長居館における石製模造品祭祀は、10点ほどの多量使用と1・2点の少量使用が存在することが分かる。また、首長により首長居館と祭祀遺構群で使用された剣形を合計した。すると部位表現不明瞭／なしの型式は、単孔・双孔合わせて約70点以上が使用されていた。これは1型式期で多量の石製模造品が入手・使用されていたことを示す。

以上、首長が執り行う祭祀をみてきた。まず使用方法として、多量使用と少量使用が存在すること。そして使用された石製模造品は、同型式期に製作されたものが、

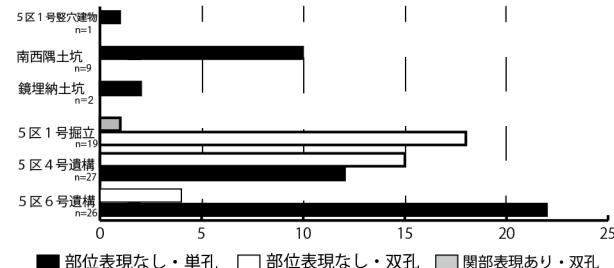


図7. 首長居館・その周辺剣形の分類結果（筆者作成）

多量に存在することを確認することができた。以上を首長が関与する石製模造品祭祀の特徴として認定し、他の遺構との比較検討を進めていく。

IV. 堅穴建物の石製模造品

(1) 群馬県西部の剣形出土堅穴建物

本章では、集落住民の入手環境・使用方法を明らかとするため、集落遺跡の堅穴建物出土剣形を分析する。

表1に群馬県西部において、金井遺跡群と近い時期に位置付けられる、TK23・47型式期～MT15型式期の剣形が出土した堅穴建物の事例を示した³⁾。石製模造品工房とみられる堅穴建物については、今回の目的が入手環境と使用形態を議論することである為、表に提示していない。また、先述の金井下新田遺跡5区1号堅穴建物など、首長居館であることが確実視される遺構も除外した。

まず堅穴建物ごとの出土点数の確認を行う。群馬県西部において、剣形が出土した堅穴建物は、58遺構である。剣形の出土点数は、1点出土した遺構が45遺構、2点が8遺構、3点が3遺構、4点が2遺構と出土点数が増えるごとに遺構数は減少する。なかでも1点出土が約77%と堅穴建物出土例の大部分を占めていることがわかる。

共伴遺物としては、高崎市情報団地遺跡10区125号住居から渡来人の存在と関係深い、韓式系軟質土器の甕が出土している。また前橋市荒砥北三木堂II遺跡2区31号住居では、土製模造品が出土している。それぞれ渡来人の石製模造品受容と土製模造品との関係性を考える上で興味深い。剣形以外の石製模造品では、類例が少ない盾形石製模造品、長頸鎌形石製模造品が出土した高崎市井出村東遺跡が存在する。残された遺物からではあるが、群馬県西部において首長以外の様々な人々が石製模造品祭祀を受容していたことが分かる。

(2) 分析と結果

堅穴建物内の出土数量は、埋没時までに使用された総量である。個別の祭祀で使用された点数が反映されているものではなく、流入した資料や時期差を有する資料も含まれているものとみられる。よって、分類基準①・②にもとづいて、入手環境と使用方法の復元を行う。

2点以上の剣形が出土した遺構を対象として、分類を行った（図8）。その結果を表2に記載した。結果を確認すると、剣形2点以上が出土した13遺構の内、遺構内で型式と穿孔数が一致したのは8遺構であった。残り5遺構の内、高崎市熊野堂遺跡168号住居（図8-1・2）

や前橋市中原遺跡 H-10 号住居（図 8-5・6）では、型式は一致するものの、穿孔数が一致しない。そのほかの 3 遺構では、型式が異なる剣形が確認できる。高崎市元島名下河原遺跡 61 号住居の図 8-3 では、茎部・関部表現が存在する。また高崎市高崎情報団地遺跡 12 区 18 号住居の図 8-26 や同市剣崎稻荷塚遺跡 SI12 の図 8-30 では、断面が三角形を呈する。これは片面鎬表現であると理解でき、異なる型式であると判断できる。

穿孔数が一致しない遺構では、1 型式期の中で複数回

の祭祀が想定される。また型式が一致しない遺構では、時期差を置いて祭祀が行われたものと理解できる。

この型式と穿孔数のまとめを元に、同時使用数を改めて算出すると、58 遺構中、1 点使用が 50 遺構で確認され、2 点が 8 遺構、3 点が 3 遺構となる。以上のことから、集落遺跡の竪穴建物における石製模造品使用は、1 点使用を基調とし、同時使用数は最大 3 点である。また 1 型式期の入手数は、部位表現なしの数量より、最大 3 点である。

表 1. 群馬県西部における剣形出土竪穴建物 (TK23・47 期～MT15 期 筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	遺構種別	剣形点数	共伴遺物	石製模造品総数	備考
白倉島原・天引向原遺跡	甘楽町	白倉 A 区 73 号住居	竪穴建物	1		1	穿孔なし
白倉島原・天引向原遺跡	甘楽町	白倉 A 区 107 号住居	竪穴建物	1	有孔円盤 2	3	穿孔なし
大屋敷遺跡	前橋市	H-12	竪穴建物	1		1	須恵器 TK23・47 型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	9 区 116 号住居	竪穴建物	1	勾玉 1	1	須恵器 TK23・47 型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	9 区 162 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	9 区 東 231 号住居	竪穴建物	1		1	須恵器 TK23・47 型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	10 区 125 号住居	竪穴建物	1	勾玉形 1・紡錘車 3・鉄鎌・韓式系軟質土器	2	須恵器 TK23 型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	10 区 127 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	10 区 196 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	11 区 133 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	11 区 158 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12 区 6 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12 区 10 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12 区 24 号住居	竪穴建物	1	勾玉 1・紡錘車	1	須恵器 TK23・47 型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	13 区 19 号住居	竪穴建物	1	勾玉 1	1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	18 区 13 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	19 区 11 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	16 区 13 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	16 区 25 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	16 区 113 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12 区 1 号住居	竪穴建物	1	紡錘車・勾玉形 1	2	須恵器 MT15 型式
熊野堂遺跡	高崎市	219 号住居	竪穴建物	1		1	
熊野堂遺跡	高崎市	4 区 11 号住居	竪穴建物	1	勾玉形 1	2	
熊野堂遺跡	高崎市	4 区 14 号住居	竪穴建物	1		1	須恵器 MT15 型式
金井下新田遺跡	渋川市	5 区 1 号竪穴建物	竪穴建物	1	勾玉形 1・勾玉 1	2	首長居館
荒砥北三木堂 II 遺跡	前橋市	2 区 31 号住居	竪穴建物	1	鏡形土製品	1	
乗附五百山遺跡	高崎市	S102	竪穴建物	1	勾玉 1	1	
加賀塚遺跡	安中市	H-12	竪穴建物	1	勾玉形 1	2	須恵器 TK23 型式
加賀塚遺跡	安中市	H-36	竪穴建物	1		1	
加賀塚遺跡	安中市	H-40	竪穴建物	1		1	
加賀塚遺跡	安中市	H-130 14 区 1 層	竪穴建物	1	剥片	1	
加賀塚遺跡	安中市	H-100 4 区 2 住	竪穴建物	1	剥片	1	
芳賀東部団地遺跡	前橋市	H 区 14 号住居	竪穴建物	1	剥片	1	
本郷下郷 C 遺跡	藤岡市	H-137	竪穴建物	1		1	
温井遺跡	藤岡市	173 号住居	竪穴建物	1		1	
前畠遺跡	富岡市	10 号住居	竪穴建物	1		1	
内堀遺跡群	前橋市	H-15	竪穴建物	1		1	
上中居遺跡群	高崎市	2 区 S12	竪穴建物	1		1	
上中居遺跡群	高崎市	3 区 S15	竪穴建物	1		1	
芳賀北原遺跡	前橋市	H-9	竪穴建物	1		1	
西浦北遺跡	高崎市	H-7	竪穴建物	1		1	
西浦北遺跡	高崎市	H-15	竪穴建物	1	有孔円盤 1	2	
井出村東遺跡	高崎市	17 号住居	竪穴建物	1		1	
三ツ寺 II 遺跡	高崎市	3 区 42 号住居	竪穴建物	1		1	
八幡中原遺跡	高崎市	168 号住居	竪穴建物	1?		1	
熊野堂遺跡	高崎市	168 号住居	竪穴建物	2		2	
元島名下河原遺跡	高崎市	61 号住居	竪穴建物	2		2	
中原遺跡群	前橋市	H-10 住居	竪穴建物	2	有孔円盤 2	4	
寺尾館台遺跡	高崎市	9 号住居	竪穴建物	2		2	
加賀塚遺跡	安中市	H-28	竪穴建物	2		2	
加賀塚遺跡	安中市	H-141	竪穴建物	2		2	
内堀遺跡群	前橋市	H-10	竪穴建物	2		2	須恵器 TK23・47 型式
今井道上遺跡	前橋市	27 号住居	竪穴建物	2		2	
荒砥北三木堂 II 遺跡	前橋市	2 区 13 号住居	竪穴建物	3		3	
元島名下河原遺跡	高崎市	57 号住居	竪穴建物	3	勾玉形 1	4	
井出村東遺跡	高崎市	30 号住居	竪穴建物	3	盾形 1・長頸鎌形 1・有孔円盤 1	6	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12 区 18 号住居	竪穴建物	4	管玉・鉄鎌	4	
剣崎稻荷塚遺跡	高崎市	S112	竪穴建物	4	剥片・未製品（剣形）	4	

(3) 小結

以上、首長居館内外の遺構と集落遺跡の堅穴建物を対象として、石製模造品入手環境と使用方法の整理を行ってきた。首長居館では、1・2点を使用したとみられる少量使用形態と10点以上の石製模造品を使用した形態が確認できた。また首長は最大70点ほどの剣形を1型式期で入手していたことも明らかとなった。

一方、集落遺跡の堅穴建物では、1～2点使用が一般的であった。また剣形の同時使用数及び、1型式の入手数は、最大3点であったことが明らかとなった。

のことから、石製模造品の入手環境と使用方法は、階層により異なっていた可能性が高い。以上をふまえた上で、金井東裏遺跡群内最大の祭祀遺構である、金井東裏遺跡3号祭祀遺構を分析する。

V. 土器集積遺構の石製模造品

(1) 金井東裏遺跡3号祭祀遺構について

3号祭祀遺構は火山灰のFA下から検出された土器集積遺構である(図9)。直径5.4mの円形区画溝内に遺物が集中する。

出土遺物として、土器905点(土師器885点、須恵器20点)、小型仿製鏡1面、玉・ガラス類294点、鉄器185点、

石製模造品158点が報告されている。土器は大型土器で囲いをした中に、壺を中心とした小型土器が重層的に重ねられた。土器内部には、祭祀に使用されたとみられる遺物が収められていた(表3)。これらの遺物は、祭祀の度に遺物が集積された可能性が高い。また攪乱などもみられず、土器内に収められた遺物は、祭祀に使用されたまとまりを維持するとみられる。本章では一括性が保持されている可能性が高い、土器内の石製模造品を対象として分類を行う。また分類結果をふまえて、同時使用の有無を検討する。

(2) 分析と結果

剣形が埋納されていた土器内21資料と、同時使用が確実視できる先述のp489群土器外を含めた計22資料群を対象として分析を行う。土器内の剣形出土点数は、1

第2表 堅穴建物出土剣形の型式と穿孔数(筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	剣形点数	部位表現あり	部位表現なし	単孔	部位表現なし・双孔
熊野堂遺跡	高崎市	168号住居	2		●1	●1	●1
元島名下河原遺跡	高崎市	61号住居	2	●1	●1		
中原遺跡群	前橋市	H-10住居	2		●1	●1	
寺尾館台遺跡	高崎市	9号住居	2			●2	
加賀塚遺跡	安中市	H-28	2			●2	
加賀塚遺跡	安中市	H-141	2			●2	
内堀遺跡群	前橋市	H-10	2			●2	
今井道上遺跡	前橋市	27号住居	2			●2	
荒砥北三木堂II遺跡	前橋市	2区13号住居	3			●2	
元島名下河原遺跡	高崎市	57号住居	3			●3	
井出村東遺跡	高崎市	30号住居	3			●3	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12区18号住居	4	●1	●2	●1	
剣崎稻荷塚遺跡	高崎市	SI12	4	●1	●1	●2	

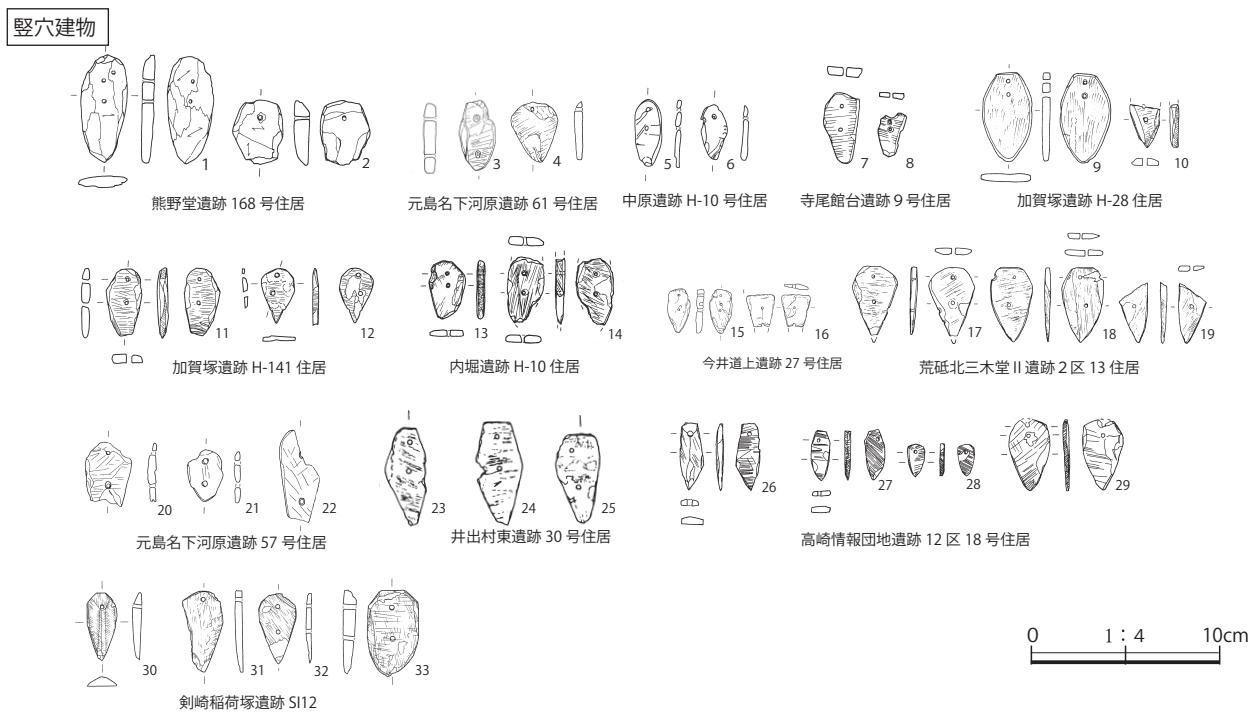


図8. 堅穴建物出土石製模造品剣形(報告書をもとに筆者作成)

点が13土器、2点が4土器内、3点以上が3土器内、そして14点がp489群土器外で確認できる。

表4に複数点の剣形が確認できた土器内資料の分類結果を示した。P506土器内(図10-7・8)を除いて、型式と穿孔数が全て一致する。このことから土器内の剣形は、基本的に同時使用されたと判断でき、その数量は1~14点である。

(3) 入手環境と使用方法の復元

以上の分析結果をふまえて、大規模祭祀遺構の入手環境と使用方法を復元する。

まず入手環境を整理する。3号祭祀遺構の剣形は、部位表現を有するものは存在しない。よって全て同型式と

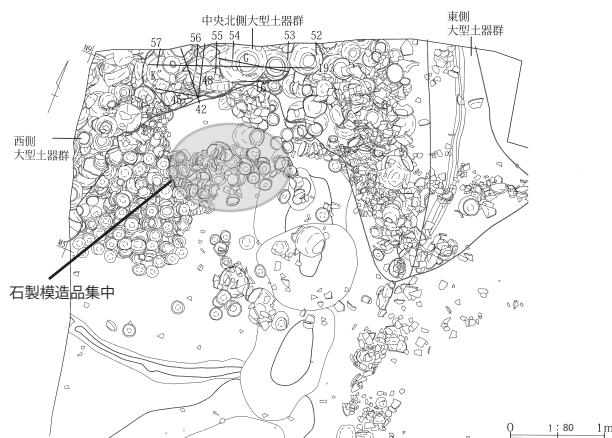


図9. 金井東裏遺跡3号祭祀遺構
(杉山ほか2019に筆者加筆)

表3. 金井東裏遺跡土器内出土模造品(筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	遺構種別	剣形点数	共伴遺物	石製模造品総数
金井東裏遺跡	渋川市	3号祭祀遺構P502-1	土器集積 土師器内	1		1
		3号祭祀遺構P508	土器集積 土師器内	1		1
		3号祭祀遺構P540	土器集積 土師器内	1		1
		3号祭祀遺構P541	土器集積 土師器内	1	鉄鎌2・鉄片2	1
		3号祭祀遺構P490-5	土器集積 土師器内	1		1
		3号祭祀遺構P477-1	土器集積 土師器内	1		1
		3号祭祀遺構P572	土器集積 土師器内	1	勾玉形1	2
		3号祭祀遺構P530	土器集積 土師器内	1	斧形1・管玉2	2
		3号祭祀遺構P510	土器集積 土師器内	1	鉄片1	1
		3号祭祀遺構P479-2	土器集積 土師器内	1	勾玉1・勾玉形1・有孔方板1	3
		3号祭祀遺構P539	土器集積 土師器内	1?	有孔円盤1	2
		3号祭祀遺構P78-1	土器集積 土師器内	1?	鉄片1・管玉?1	1
		3号祭祀遺構P80-3	土器集積 土師器内	1?	管玉2	1
		3号祭祀遺構P498	土器集積 土師器内	2	鉄片2	2
		3号祭祀遺構P506	土器集積 土師器内	2	勾玉1	2
		3号祭祀遺構P84-6	土器集積 土師器内	2		2
		3号祭祀遺構P490-1	土器集積 土師器内	2	器種不明形1	3
		3号祭祀遺構P511	土器集積 土師器内	3	有孔方板1・勾玉形1・有孔円盤1・管玉1・鉄片1	6
		3号祭祀遺構P525-1	土器集積 土師器内	3	有孔円盤2・有孔方板1・勾玉形1・器種不明形1	7
		3号祭祀遺構P489	土器集積 土師器内	4	有孔円盤1・管玉1・鉄鎌1	5
		3号祭祀遺構P500	土器集積 土師器内	6	有孔円盤2・器種不明形2・鉄鎌3・鉄片7	10
		3号祭祀遺構P489	土器集積 土師器外	14	有孔円盤1・勾玉形2	17

みなせることから、1型式期で製作から使用まで行われたことが分かる。図10より少なくとも約40点が、短期間で入手・使用されたことが分かる。

使用方法としては、1~14点の剣形が同時使用された可能性が高いことを確認できた。ここで共伴する他の石製模造品を参照すると(表3)、剣形の点数3点を境として、数量が明らかに増加する。これは1・2点の剣形を用いた使用形態と3点以上では、異なる志向が存在したことを見取れる。剣形の分析結果より、土器ごとに石製模造品の同時使用がなされたと判断できる。よって、石製模造品の使用数量と使用器種により分けられる、2系統の使用形態が存在したことを示唆する。

また、まとまりが把握できなかった為、検討に加えなかったが、土器外にも多数の石製模造品が存在する。数量的には土器外出土数の方が多いため、土器内以上の同時使用数が存在することは、p489群土器外の例から見ても十分にあり得ることに思える。

以上いくつかの分析を試みてきた。これらの情報を元にして、大規模祭祀遺構において石製模造品を使用・供給した階層について考察を行う。

VI. 土器集積遺構の祭祀主体階層

(1) 石製模造品の使用形態

これまでの分析結果をもとにして、使用方法の類型化を行う。まず明らかとなったこととして、当該期の石製模造品使用形態は、石製模造品の使用数と使用器種の組

大規模祭祀遺構における石製模造品祭祀の主体

み合わせより、2形態に分けられることがあげられる。

首長居館では、南西隅土坑例より農工具形を少量と剣形10点、その他有孔円盤などを1つの紐で繋ぎ、1つの祭具として扱っている状況が明らかとなっている。居館南側に位置する祭祀遺構群も、同型式の多量の剣形を中心として、そこに他器種が加わった石製模造品組成を示す。南西隅土坑と共通性が高い。一方、堅穴建物においては、剣形の同時使用点数は1~2点がほとんどであった。他器種の石製模造品が伴うことも少ない。首長居館内外と集落遺跡の使用方法は、明らかに異なっていることがわかる。

次に使用方法の類型化を行う。まず南西隅土坑やp489群土器外で確認できた複数器種・剣形多量で構成される石製模造品使用形態を使用形態Aと設定する。そして、堅穴建物を中心にみられた単器種1・2点を用いた少量使用形態を使用形態Bとして設定する(図11)。使用形態Aの設定にあたり、剣形何点以上が使用形態Bとの境となるのか判断する時に、3号祭祀遺構の土器内データが参考になる。3号祭祀遺構土器内では、剣形の点数3点を境として、共伴する他器種の石製模造

品が増加することを確認した。ここに使用形態A・Bの境を設けることが適当であると考えられる。よって、使用形態Aの基準を剣形3点以上+他器種と設定する。

(2) 石製模造品の階層差について

以上、例外も多々存在するかと思うが、石製模造品の使用方法が2形態存在することが明らかとなった。では本稿の本題である、大規模祭祀遺構出土の石製模造品がどの階層によって使用されたのか、考察を行う。

表5へ分析結果をもとに、階層と使用形態・型式ごとの入手数の関係性について記載した。この表をもとに、まずは使用方法と階層の関係性を考察する。

使用形態Aは、首長居館内と首長居館周辺及び大規模祭祀遺構で確認できる。使用者が不明な大規模祭祀遺構以外は、首長層を最有力使用候補と考えることができる。また集落の堅穴建物では、使用形態Bが多く用いられているが、使用形態Aはほとんど確認できない。

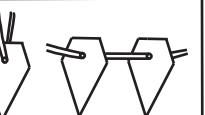
使用形態 A	使用形態 B
	
特徴	詳細
複数器種・剣形多量	同型式かつ穿孔数が同じ剣形3点以上と他器種により構成
剣形単器種・少數	同型式かつ穿孔数が同じ剣形1・2点のみで構成

図11. 石製模造品の使用形態 (筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	遺構種別	剣形点数	部位表現あり	部位表現なし・単孔	部位表現なし・双孔
		3号祭祀遺構P84-6	土器集積	土師器内	2	●2	
		3号祭祀遺構P490-1	土器集積	土師器内	2		●2
		3号祭祀遺構P498	土器集積	土師器内	2		●2
		3号祭祀遺構P506	土器集積	土師器内	2	●1	●1
金井東裏遺跡	渋川市	3号祭祀遺構P511	土器集積	土師器内	3		●3
		3号祭祀遺構P525-1	土器集積	土師器内	3		●3
		3号祭祀遺構P489	土器集積	土師器内	4		●4
		3号祭祀遺構P500	土器集積	土師器内	6		●6
		3号祭祀遺構P489	土器集積	土師器外	14		●14

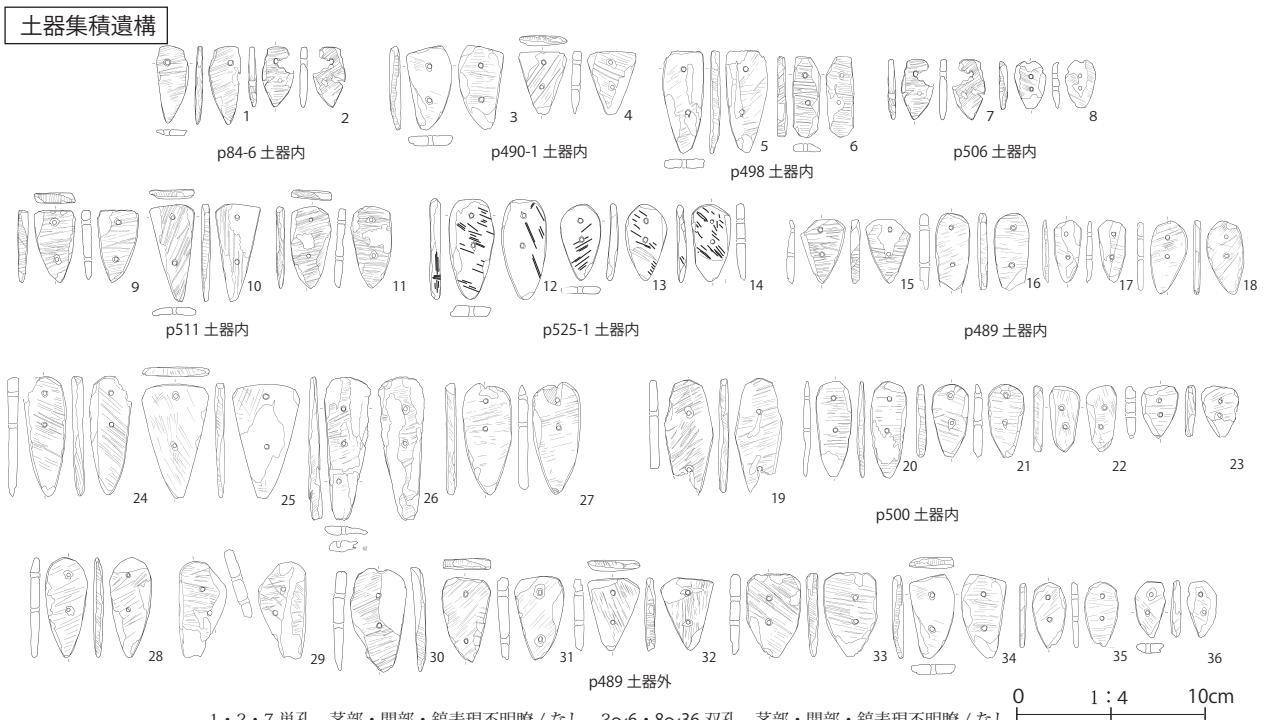


図10. 金井東裏遺跡3号祭祀遺構出土石製模造品 (杉山ほか 2019 をもとに筆者作成)

以上のことから、集落住民は、祭祀形態の差や石製模造品供給量の差などにより、使用形態 A を構成できなかつたと考えられる。

次に入手環境と階層の関係性について考える。型式ごとの剣形入手数は、首長居館内では 13 点、首長居館周辺遺構では約 70 点であった。この首長居館内外の遺構は、同時期に存在し、また地理的にも 30m ほどしか離れていない。よって同一の人物・集団により、祭祀が行われた可能性が高い。このように考えると、首長層は 1 型式の時間幅の中で、80 点以上の石製模造品の入手が可能であったことが分かる。農工具形の石製模造品が複数伴うことも特徴である。

集落遺跡の堅穴建物では、剣形 1 点使用がほとんどであった。また型式ごとの入手数は最大で 3 点であることも確認してきた。首長居館周辺の入手環境とは大きく異なっていることが分かる。ここで集落住民が大規模祭祀遺跡の様な露天での祭祀を行なった場合に、どのような石製模造品使用をしていたのか確認する。これについて鶴間正昭氏が論じている（鶴間 2007）。

鶴間氏は古墳時代の群馬県を中心に、土器集積を伴う露天祭祀遺構について分析を行った。その結果、土器集積量と祭祀遺物の多彩性、石製模造品数量は、相関関係にあることを示された。また一般的な集落遺跡の祭祀遺構は、少量の土師器と少量の石製模造品により構成されていることを指摘された。具体例として、集落の共同祭祀場としての性格が推定されている、渋川市中筋遺跡 1 号祭祀を取り上げている。この遺構は、金井遺跡群と同時期であり、土師器と剣形 1 点が出土している。使用形態 B であることが確認できる。

以上のことから、集落遺跡の住民は、石製模造品を大量に入手することができなかつたと考えられる。首長居館内外の結果と比較すると、階層ごとに入手環境が大きく異なっていることは明確である。

このように、一般的な集落住民と首長とでは、石製模造品の入手環境・使用方法が異なっていることが確認できる（図 12）。

(3) 大規模祭祀遺構の石製模造品使用階層

以上、階層と石製模造品の在り方についてみてきた。一般集落住民は使用形態 B を主とし、首長層が使用形

表 5. 遺構種別と使用形態（筆者作成）

遺構種別	使用者	使用形態A	使用形態B	型式ごとの入手数量
首長居館内	首長	●	●	13点
首長居館周辺	首長	○		約70点
集落堅穴建物	集落住民		●	1~3 点
大規模祭祀遺構	?	●	●	40点以上

○は推定

態 A・B を持ち合っていた。そして 3 号祭祀遺構（大規模祭祀遺構）では、使用形態 A・B が存在する。大規模祭祀遺構における使用形態 A の存在は、首長層の関与を想定させる。また同型式の剣形が 40 点以上使用されていることも、首長層の関与を裏付ける。3 号祭祀遺構で用いられた石製模造品の数量は、一般集落には流通していない。これは製作数量・流通のどちらか、または双方の面で石製模造品を増産・集約するようなはたらきかけが行われたことを示す。この操作は同じく多量の石製模造品が使用された首長居館内外でも行われたとみられる。よって首長による製作数量や流通のコントロールを通して、3 号祭祀遺構の石製模造品は用意されたと判断できる。

以上のことから、大規模祭祀遺構の石製模造品入手には、首長が大きく関わっていることが明らかである。また使用形態 A が確認できることから、石製模造品の供給のみでなく、首長が祭祀を行なった可能性も考えられる。

ところで、3 号祭祀遺構の土器内一括資料をみると、使用形態 B の石製模造品も存在する。使用形態 B については首長層及び集落住民も用いる使用形態である。よって集落住民の関与もまた推定することが可能である。3 号祭祀遺構に供献された土師器の量は、首長居館南側の祭祀遺構群よりも遥かに多い。集落住民も土師器や少量の石製模造品使用を通して、祭祀行為に参加していたとも解釈できる。また仔細は論じえないが、3 号祭祀遺構や首長居館内外にて使用された剣形は、集落で使用されたものより大型である（図 8, 図 10）。これは、集落住民の祭祀への参加を想定した場合、集落住民が首長居館と同様の、または関係のある工房から供給された剣形を使用していたことになる。以上のこととは、首長による石製模造品の配布が存在したことを想定させる。

(4) 祭祀行為の主体階層

以上、大規模祭祀遺跡の祭祀主体階層について、石製

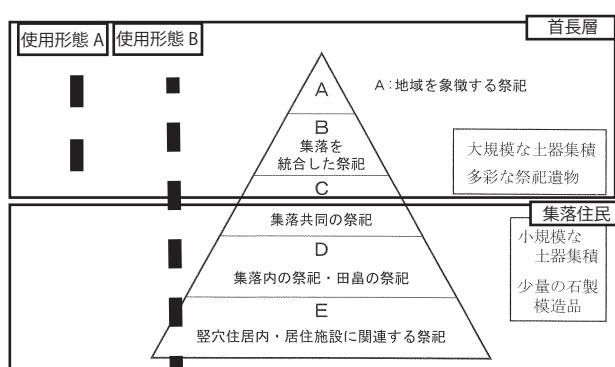


図 12. 石製模造品使用形態と階層・祭祀形態

（鶴間 2007 に筆者加筆）

模造品を用いて分析・考察を行ってきた。

本稿の分析結果をふまると、大規模祭祀遺構が形成される要因となった祭祀については、首長層の主体性が明確である。3号祭祀遺構では、本稿で取り扱った石製模造品以外に斧形や短甲形の石製模造品が出土している。斧形は古墳副葬品として一般的にみられるものであり、短甲形の出土する遺構は限定的である。集落住民が自力で入手したものであるとは考えづらい。小型仿製鏡や多量の鉄器も3号祭祀遺構内で確認されており、同様に考えることができる。

古墳副葬品の研究からは、古墳時代中期は首長の司祭的性格が薄れると判断されることが多い。しかし、その後半～末段階においても、首長居館とその周辺での祭祀実施状況などから、首長層にとって祭祀が重要な役割であったと考えられる。首長居館である群馬県高崎市三ツ寺I遺跡における導水祭祀遺構の存在、居館内外にみられる多数の祭祀遺物などもこれを裏付ける。

首長は石製模造品を含む、祭具として認知されていた遺物を祭祀場などへ提供した。また首長自身も祭祀行為を通じて、地域祭祀権の管理を行った。それは首長の司祭者としての一側面が反映されたものであると考えたい。

本稿の分析結果から、首長は地域の祭祀に携わり、リードすることが重要な役割であったことが、石製模造品を用いることで確認できた。首長の司祭者の側面は、古墳時代中期後半から末頃の時期においても継続していた。これは当該期の古墳副葬品からは認識が難しく、首長の祭祀に関する性格を今後検討していく必要性を感じる。加えて多くの階層に、石製模造品を用いた祭祀が普及することも、東国の中古時代中期後半から後期初頭の特徴である。多くの階層が共通の祭具を使用した祭祀を行った意味についても、首長層による影響を含めて検討することが、石製模造品普及の意義を考える上で重要である。

おわりに

本稿では、群馬県西部の金井遺跡群を中心に、大規模祭祀遺構で使用された石製模造品が、どの階層により使用されたのか検討した。剣形を用いて、階層ごとに入手環境や使用方法に違いがあったことを明らかとした。そして大規模祭祀遺跡と首長居館の共通性から、首長層が石製模造品の供給を行ったことを指摘した。

また複数器種・剣形多量の使用形態は、東国における石製模造品の多量使用や客体的な農工具形の存在を考える上で重要なものである。今後とも検討を進めていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、明治大学の先生方、及び群馬県埋蔵文化財調査事業団の方々には研究指導や資料実見など様々なご助力・ご鞭撻をいただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

なお、2023年度明治大学阿部英雄研究奨励金による成果を一部含みます。

使用した発掘調査報告書は紙数の都合上割愛した。

註

- 1) 本稿で勾玉形とするものは、剣形と有孔円盤と同じく、砥石により板状に研磨された扁平な勾玉のことを示し、仕上げ研磨がなされた丸みのあるものは、滑石製であっても勾玉とした。
- 2) 剣形石製模造品の部位表現とは、茎部・関部・鎬を指す。
- 3) 遺構の時期比定は、報告書を参考にしつつ、坂口 1986・1987・1999、藤野 2019 の土器編年をもとに筆者が行った。

参考文献

- 大場磐雄 1962 「石製模造器具」『日本考古学辞典』 pp291–292、日本考古学協会
 小島敦子 2021 「囮い状遺構造営前の古墳時代集落」『金井下新田遺跡「古墳時代以降編」分析・論考編』調査報告書第689集、pp236–251、群馬県埋蔵文化財調査事業団
 坂口一 1986 「榛名山ニツ岳起源 FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡』 pp103–119、群馬県教育委員会
 坂口一 1987 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年－共伴関係による土器形式組列の検討－」『研究紀要』4、pp.29–48、群馬県埋蔵文化財調査事業団
 坂口一 1999 「群馬県における古墳時代中期の土器の様相－荒砥北三木堂遺跡の出土土器を中心にして－」『東国土器研究』第5号、pp79–87、東国土器研究会
 佐久間正明 2009 「東国における石製模造品の展開－刀子形の製作を中心に－」『日本考古学』第27号、pp.21–55、日本考古学協会
 佐久間正明 2011 「関東地方における古墳出土石製模造品の製作構造について－上野の主要古墳を中心に－」『考古学研究』第58卷第2号、pp.54–73、考古学研究会
 佐久間正明 2017 『石製模造品から見た古墳時代の葬送と祭祀』、東北大学大学院文学研究科歴史学専攻
 篠原裕一 1997 「石製模造品剣形の研究」『祭祀考古学』創刊号、pp.25–53、祭祀考古学会
 杉山秀宏 2021 「金井東遺跡3号祭祀遺構遺構の再検討」『研究紀要』39号、pp.59–78、群馬県埋蔵文化財調査事業団
 杉山秀宏 2021 「祭祀関連遺構出土の石製模造品について」『金井下新田遺跡「古墳時代以降編」分析・論考編』調査報告書第689集、pp.213–229、群馬県埋蔵文化財調査事業団
 高橋直樹 1992 「千葉県内から出土する玉類の原材料の原産地についての予察」『千葉県文化財センター研究紀要』13、pp.225–243、千葉県文化財センター

鶴間正昭 2007 「祭祀遺構にみる土器集積」『原始・古代日本の祭祀』、pp.346-367、同成社
早川由紀夫、中村賢太郎、藤根久など 2015 「榛名山で古墳時代に起きた渋川噴火の理化学的年代決定」『群馬大学教育学部紀要』自然科学編 63、pp.35-39
原雅信・桜岡正信 2022 「金井下新田遺跡の囲い状遺構の構造とその性格について—「金井型居館」を考えるー」『研究紀要』40、pp.49-61、群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本埋蔵文化財研究会 1993 『古墳時代の祭祀—祭祀関係

の遺跡と遺物—』第 II 分冊、東日本埋蔵文化財研究会
平岩俊哉 1996 「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要』第 12 号、pp.17-36、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
平岩俊哉 1996 「古墳時代集落内祭祀小考—「集積型」を中心として」『博古研究』第 12 号、pp.28-43、博古研究会
平岩俊哉 2001 「古墳時代集落祭祀とその周辺 -「集積型」・「配列型」祭祀についての検討」『茨城大学考古学研究室 20 周年記念論文集 日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究報告書第 4 冊、pp.216-232、茨城大学人文学部考古学室

Actors of Stone Models Rituals in Large-scale Ritual sites

-A Study of western part of Gunma Prefecture, eastern Japan, in the Latter Half of the Middle Kofun Period (late 5th century)-

TERANISHI Yoshiki

This paper studies stone models excavated from large-scale ritual sites in western Gunma Prefecture in eastern Japan during the second half of the Middle Kofun Period (late 5th century). The aim was to clarify the actors of the rituals through the study of these stone models.

Stone models were mainly made from soft stones such as talc and serpentine. They imitated iron and bronze objects such as swords, mirrors and agricultural tools, and were produced and used mainly in the mid-Kofun period (5th century). Their use is seen in funerary rituals in burial mounds and in settlements, and they are one of the artefacts that characterize the middle Kofun period. Of these, the large ritual sites were where the most stone models were used, but it was not clearly defined who used them. The author considered that thinking about users is very meaningful for local communities. Several studies were conducted to clarify these issues.

First. The number of stone models available for each level of the hierarchy and their use during a certain period of time, with a focus on sword-shaped stone models, were summarized.

The results showed that a large number of sword-shaped models produced at the same time were used in the regional chief's headquarters and its surroundings, as well as in large-scale ritual sites, and that three or more pieces plus other types of vessels were regarded as a single ritual tool. On the other hand, in general settlements, the use of stone models was mostly limited to one or two pieces. Therefore, it was assumed that the involvement of the chiefs was essential for the establishment of large-scale ritual remains. Based on the above, it was inferred that the role of the chiefs was to lead the local rituals through the use and supply of ritual objects.

KEY WORDS:

Kofun period, Eastern Japan, stone models, rituals